

久保紘章先生 追悼の辞

ヒロタ, アキラ / 廣田, 明 / Hirota, Akira

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration :
reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福祉研究

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

2

(発行年 / Year)

2005-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015441>

久保紘章先生 追悼の辞

現代福祉学部長 廣 田 明

久保紘章先生

先生に初めてお目にかかりましたのは、先生が東京都立大学人文学部から設置準備中の法政大学現代福祉学部に移ることをご決断くださり、多摩キャンパスを見学に来られたときです。駐車場に降り立った先生の笑顔を拝見したときの私の第一印象は、《何という涼しい目をしたお方だろう》という驚きでした。日本におけるソーシャルワークの代表者で自閉症研究の第一人者と伺っておいりましたので、さぞかし近寄りがたく恐れ多い方だろうと想像していたのですが、あのご温顔に接して、緊張が一気に解れてしまいました。

その1週間ばかり前、先生がご内諾くださったとの朗報が私たち設置準備委員に届いたとき、キリスト教の宗教画にありますような、一条の光がパッと差し込んで行く手を照らしてくれるという不思議な内的体験をいたしまして、《これで行ける、前に進める》と皆で喜びを共にしたことがまるで昨日の出来事のように鮮やかに脳裏に蘇ります。先生にとって不確実でリスクを伴うこの学部への移籍は、神に促されたご決断だったのではないかと推察いたします。こうして見えない力の導きで学部の核となる先達に恵まれた私たちは、このあと、確信をもって学部づくりを進めることができたのでした。

2000年4月に現代福祉学部が無事に船出したあと、ふとしたきっかけで先生の研究会に参加する機会を与えられたとき、もう一度先生の存在の大きさを実感いたしました。先生のご研究とお人柄を慕って実に多種多様な方々が久保サロンに集い結び学び、そして生きる力を得ていることを知りました。ソーシャルワークの真骨頂を垣間見た思いがいたしました。久保サロンには先生の学問と実践が凝縮されていると感服した次第です。2002年には大学院人間社会研究科を開設しましたが、このときは先生のご業績とお人柄を慕って全国から多数の応募者が集まり、またしても先生のお力を痛感しました。

このように久保先生は大きな存在であったにもかかわらず、教授会の一員としては控え目で禁欲的な方でした。奢らず、威張らず、己の使命をわきまえ、ひたすら研究と教育に専念しておられました。教育者としての久保先生は学生にとって厳しいけれども優しい慈愛に富んだ導き手でした。ゼミ論集の編集のような面倒な作業にも人一倍ご熱心で、四国学院時代の文集を宝物のように大切に保管しておられました。先生をお慕いして集まった者は誰でも自分の居場所を見つけることがで

きたのではないのでしょうか。

先生あの涼しい眼差しに翳りが見え始めたのは1年くらい前のことでしょうか。その頃から先生はご病状からの回復が思わしくないことを覚られたようにお見受けしました。しかし先生は、平常心を失わず、毅然として、与えられた時間のなかで己の生を全うすべく全力を尽くしてくださいました。学部の代表として最後にお目にかかったとき、先生の《無念です》との一言には、お返しする言葉がありませんでした。私たちにとっても先生を失うことは痛恨の極みであります。残念なことに、せめて愛弟子たちの巣立ちを見届けたいという先生の切なる願いはかないませんでした。しかし先生、もう悲しまないでください。先生はご自身の生きざまを通じて、多くの人々に生きる希望と力を授けてくださいました。これこそ先生が残された最大の贈り物であります。

久保紘章先生

色々とお世話になりました。先生はこの学部の大恩人です。先生との出会いは私たちの誇りです。先生、長い間ご苦勞様でした。どうか安らかにお休みください。

2004年8月5日

※註記：この「追悼の辞」は平成16年8月5日におこなわれました、久保先生のご葬儀での廣田学部長の弔辞を掲載させていただきました。